

目指す学校像	○豊かな心が育つ明るく楽しい学校 ○学ぶ喜びを味わえる活力ある学校 ○家庭・地域とともに歩む開かれた学校
--------	--

重点目標	1 ICTを活用した学びの改革と個別最適な学びの実践 2 生徒指導の徹底と教育相談の充実 3 コミュニティ・スクールによる地域に開かれた学校づくり 4 教職員の指導力の向上と業務の精選
------	---

※重点目標は4つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
 ※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成 (8割以上)
	B	概ね達成 (6割以上)
	C	変化の兆し (4割以上)
	D	不十分 (4割未満)

年度		学 校 自 己 評 価			年 度 評 価		学校運営協議会による評価	
年度		目 標			年 度 評 価		実施日令和5年2月6日	
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校運営協議会からの意見・要望・評価等
1	<現状> ○全国学力・学習状況調査では、国語、算数ともに、全国や県の平均正答率を上回っている。 ○学校評価で「授業の内容をよく理解することができた」の質問において、「十分できている」と回答した児童が62%である。 ○市学習状況調査では、学びに向かう力等に関する質問に肯定的な回答をした児童の割合は、市平均と比べて国語で多く、社会、算数、理科ではほぼ市平均、G・Sでやや低い。 <課題> ○ICTを効果的に活用した授業について、研究を深める必要がある。 ○特に社会、算数、理科、G・Sでの学習意欲の喚起が課題である。	<ul style="list-style-type: none"> タブレットPCを効果的に活用した「個別最適な学び」と「協働的な学び」に関する指導方法の研究 「さいたまSTEAM教育」の推進 	①タブレットPCを活用し、年間3回の研究授業・研究協議会を行い、個別最適な学びについての指導法を研究する。 ②タブレットPCを活用した学習活動の指導計画や実践事例を学年ごとにデータで蓄積してまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> タブレットPCを活用した研究授業・研究協議会を実施し、それをもとに指導法の研究成果をあげられたか。 学校評価で「授業の内容をよく理解することができた」の質問において、「十分できている」と回答した児童が65%以上になったか。(R4は62%) 	<ul style="list-style-type: none"> タブレットPCを活用した授業を日常の授業から実践した。ほぼすべての学級で、毎日ICTを活用した授業を実施した。 学校課題研修としてタブレットPCを活用した研究授業を行い、効果的な活用について研究を深めた。 学校評価での該当項目の「十分できている」の回答は66%(前年度比+4%)であった。 	A	<ul style="list-style-type: none"> タブレットPCを効果的に活用し、個別学習の充実が図られた。タブレットPCをはじめとするICTの活用は、児童の学習に大変有効であることが確認できた。しかし、タブレットPCのデータ等をもとにした話し合い活動による協働的な学びについては、課題が残った。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童のICTに対する苦手意識は薄く、進んでICTを活用しながら学習に取り組んだり、発表物を作成したりできている様子である。 YOUTUBEの規制など、タブレット使用上のルールの明確を明確にし、共有していくことが必要である。 感じや計算の宿題等でスタディ・サプリー等をさらに活用していくとよい。 オンライン授業の実施により、児童が休んだ時の不安が軽減されている。
2	<現状> ○市学習状況調査では、「自分にはよいところがあると思う」の質問に、肯定的な回答をした児童の割合は、市平均を下回る学年が複数あった。 ○創立72年目を迎え、経年劣化等により、傷んでいる施設・設備が多い。 <課題> ○児童一人ひとりの状況を的確に把握し、適切なタイミングでケースを行うなど組織的に支援・相談していく体制づくりが必要である。 ○児童と教職員の安全を考えて、計画的に教育環境の整備をしていくことが必要である。	<ul style="list-style-type: none"> 児童一人ひとりに寄り添った教育支援・教育相談体制の充実 教育環境の整備と効果的な予算運用 	①道徳教育の推進を教育活動の中心に据え、心豊かな児童を育成する。 ②課題を抱える児童の指導・支援にチームで対応できるようにケース会議を開催する。	<ul style="list-style-type: none"> 道徳授業を確実に実施し、自己肯定感を高めることができたか。 関係職員によるケース会議を実施し、支援方針を検討する。必要に応じて、外部機関等にも協力を要請する。 	<ul style="list-style-type: none"> 2学期に教育相談月間を設け、担任が全児童と面談を行った。 道徳授業を計画的に実施し、児童の心の教育に取り組んだ。 外部専門機関との連携を含めたケース会議を有効に活用し、効果的な支援を行うことができた。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 担任が一人で対応するのではなく、学年や学校全体で組織的に児童を支えるため、ケース会議の常態化、外部専門機関との連携を強化する。 	<ul style="list-style-type: none"> 自己肯定感の尺度は、発達段階でことなるため、自己肯定感を高めることができたかという点を評価することは難しい。 道徳の授業を通して、心豊かな児童の育成を継続してもらいたい。 他者の価値を認められる柔軟性を持つことができるようになってもらいたい。 自分で考え行動する児童を育てることで、自己肯定感の高まりが期待できる。
3	<現状> ○学校運営協議会で熟議の上、本年度のテーマを昨年度に引き続き、『『あいさつ』や『思いやり』のある行動ができる上っ子の育成と設定した。 <課題> ○本年度のテーマについて、学校、地域、家庭が具体的にどのような取組をしていくかを検討、実施、評価していくことが必要である。	<ul style="list-style-type: none"> 本年度のテーマを地域・家庭と共有する教育活動の公開・情報発信 地域、家庭とともにあるコミュニティ・スクールの実施 	①学校だよりや学校Webページ等を利用し、学校運営協議会で設定した本年度のテーマを地域・家庭に広く情報発信する。 ②あいさつや思いやりのある行動を称賛し、地域、家庭でも取り組める具体的な活動を学校運営協議会で協議し、実施する。	<ul style="list-style-type: none"> 学校運営協議会の内容を学校Webページに掲載し、地域、家庭に広報し、具体的な取組が実施できたか。 学校評価で「積極的な情報提供」の質問で、保護者からの肯定的な回答が、82%以上になったか(R4は82%)。 	<ul style="list-style-type: none"> 本年度設定した『『あいさつ』と『思いやり』のある行動ができる上木っ子の育成』というテーマについて、学校だよりで広報した。 学校運営協議会では、学校、地域、家庭(保護者)が具体的にどのような場面でテーマに迫れるかを熟議で話し合った。 学校評価での該当項目の肯定的回答は76%(前年度比-6%)であった。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 学校運営協議会の内容については、より広く、保護者や地域にみなさまに周知していくことが必要である。 大人同士も交流を深め、お互いを理解する機会としたい。 コミュニティ・スクールによって、学校の様子が見やすくなってきた。 	<ul style="list-style-type: none"> コロナ禍で中止となっていた地域行事が復活している。行事を通して、児童と地域の接点を持たせていきたい。 大人同士も交流を深め、お互いを理解する機会としたい。 コミュニティ・スクールによって、学校の様子が見やすくなってきた。
4	<現状> ○Formsを活用した、欠席、遅刻、早退連絡システムが定着してきた。 ○令和3年度から学校課題研究として「ICTを活用した指導方法」について研修を重ねており、エバンジェリストが中心となり、OJTを重ねている。 ○令和4年度の「よい授業」では、因子③で前都市平均を上回り、因子①②④ではそれを下回った。 <課題> ○経験の浅い教職員や学習指導等に不安をもつ教職員への支援を継続して実施する必要がある。	<ul style="list-style-type: none"> 意欲に満ちた教職員集団を醸成する校内研修の実施 教職員一人ひとりに応じた働き方改革の実施 	①管理職による授業参観(特に経験の浅い教員)を年間2回以上実施し、具体的な指導・助言を行う。 ②小学校教科担任制の実施により、教員の専門性を高め、授業の質の向上を図る。	<ul style="list-style-type: none"> 経験の浅い教員、教科担任教員、専科教員の授業の質の向上が見られたか。 高学年以外の学年でも、交換授業等を実施することができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> 年次研修や指導訪問、学校課題研修などの研究授業の機会をとらえ、管理職による授業参観を実施し、指導・助言を行った。 全学年において、様々な形式で交換授業を実施することができた。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 今後も経験の浅い教員の着任が予想されるため、管理職や経験豊かな教員による指導、助言が欠かせない。 教科担任制、学年交換授業をさらに充実させていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> タブレットが積極的に使用されている様子がわかった。どのクラスでも、どの先生でもタブレットが有効的に活用できるように。教員のスキルアップができるような仕組みが必要である。 多忙極まる中で、若手教員の育成というのは難しいと思うが、組織全体で育てる必要がある。 来年度も新しい取組が予定されているので、一層の業務の精選が必要である。

